美しい時代へ──東急グループ

WIENER STAATSBALLETT

# マニュエル・ルグリ×ウィーン国立バレエ団の集大成。

ルグリ初演出《海賊》本邦初公開《ヌレエフ・ガラ》で、バレエ界の伝説が生む御業をご堪能あれ！

マニュエル・ルグリ版
《海賊》日本初演

ルドルフ・ヌレエフに捧ぐ
《ヌレエフ・ガラ》

# ウィーン国立バレエ団 2018

Legris's Le Corsaire Japan Premiere | Nurejew Gala Hommage to Rudolf Nurejew

5.9［水］—13［日］ Bunkamura オーチャードホール

主催：Bunkamura　後援：オーストリア大使館／オーストリア文化フォーラム　企画協力：ベルチェアソシエイツ

©Wiener Staatsoper/ Michael Pöhn ©Wiener Staatsballett/ Ashley Taylor

©Wiener Staatsoper/ Michael Pöhn

## 最強の“ルグリ・チルドレン”がここに──ウィーン国立バレエ団が誇る至極のソリスト、総出演。

オルガ・エシナ Olga Esina
橋本 清香 Kiyoka Hashimoto
リュドミラ・コノヴァロワ Liudmila Konovalova
ニーナ・ポラコワ Nina Poláková
マリア・ヤコヴレワ Maria Yakovleva
デニス・チェリェヴィチコ Denys Cherevychko
ダヴィデ・ダト Davide Dato
木本 全優 Masayu Kimoto
ウラジーミル・シショフ Vladimir Shishov
イオアンナ・アヴラアム Ioanna Avraam
アリス・フィレンツェ Alice Firenze
ナターシャ・マイヤー Natascha Mair
ミハイル・ソスノフスキ Mihail Sosnovschi
フランチェスコ・コスタ Francesco Costa
アンドレイ・カイダノフスキー Andrey Kaydanovskiy
ジェロー・ウィリック Géraud Wielick

## ヌレエフ・ガラ【上演予定演目】

### 5月9日［水］18:30

《ワルツ・ファンタジー》より 振付：ジョージ・バランシン／音楽：M.グリンカ
《Opus 25》振付：エノ・ペシ／音楽：F.ショパン
《ヨゼフの伝説》より 振付：ジョン・ノイマイヤー／音楽：R.シュトラウス
《ソロ》振付：ハンス・ファン・マーネン　音楽：J.S.バッハ
《ペール・ギュント》より 振付：エドワード・クルーグ／音楽：E.グリーグ
《ランデヴー》より 振付：ローラン・プティ／音楽：J.コスマ
《マーマレーション》より 振付：エドワード・リアン／音楽：E.ボッツ
《ル・シーニュ 白鳥》振付：ダニエル・プロイエット／音楽：O.ヴォイチェホヴスカ
《コンチェルト》より 振付：ケネス・マクミラン／音楽：D.ショスタコーヴィチ
《赤のジゼル》より 振付：ボリス・エイフマン／音楽：P.I.チャイコフスキー

### 5月10日［木］14:00

《ストラヴィンスキー・ムーヴメンツ》より 振付：アンドラーシュ・ルカーチ／音楽：I.ストラヴィンスキー
《シルヴィア》より 振付：ジョン・ノイマイヤー／音楽：L.ドリーブ
〈ヌレエフ・セレブレーション〉（振付：ルドルフ・ヌレエフ／構成：マニュエル・ルグリ／音楽：P.I.チャイコフスキー、A.グラズノフ）
《くるみ割り人形》第2幕より “アダージオ”
《ライモンダ》
第2幕より “アブデラーマンのヴァリエーション” “サラセン人の踊り” “ライモンダのヴァリエーション”
第3幕より “ヘンリエットのヴァリエーション” “4人の男性のヴァリエーション” “クレメンスのヴァリエーション”
《白鳥の湖》
第1幕より “パ・ド・サンク”“王子のヴァリエーション”
第2幕より “スペインの踊り”“黒鳥のパ・ド・ドゥ” ほか

＊上演順の表記ではございません。＊一部を除き録音音源を使用致します。詳細キャストは決定次第、BunkamuraHPにて発表致します。

## 海 賊【主な配役】 指揮：井田 勝大　演奏：シアター オーケストラ トーキョー

| | 5月12日［土］12:30 | 5月12日［土］18:30 | 5月13日［日］14:00 |
|---|---|---|---|
| メドーラ | ニーナ・ポラコワ | マリア・ヤコヴレワ | オルガ・エシナ |
| コンラッド | デニス・チェリェヴィチコ | キミン・キム（ゲスト・ダンサー） | ウラジーミル・シショフ |
| グルナーラ | ナターシャ・マイヤー | リュドミラ・コノヴァロワ | 橋本 清香 |
| ランケデム | フランチェスコ・コスタ | ミハイル・ソスノフスキ | ジェロー・ウィリック |
| ビルバント | 木本 全優 | ダヴィデ・ダト | ダヴィデ・ダト |
| ズルメア | イオアンナ・アヴラアム | アリス・フィレンツェ | アリス・フィレンツェ |
| サイード・パシャ | アンドレイ・カイダノフスキー | アンドレイ・カイダノフスキー | ミハイル・ソスノフスキ |
| オダリスク | ニキーシャ・フォゴ／ニーナ・トノリ<br>アニータ・マノロヴァ | アデーレ・フィオッキ／ニーナ・トノリ<br>ニキーシャ・フォゴ | 芝本 梨花子／アニータ・マノロヴァ<br>ナターシャ・マイヤー |
| 第3幕のソリスト | エレーナ・パッターロ／アデーレ・フィオッキ<br>エステル・レダン／芝本 梨花子 | エレーナ・パッターロ／アニータ・マノロヴァ<br>エステル・レダン／芝本 梨花子 | エレーナ・パッターロ／アデーレ・フィオッキ<br>エステル・レダン／オクサナ・キヤネンコ |

## 2018 5.9［水］—13［日］ Bunkamura オーチャードホール

**2/18一斉発売**　S¥19,500　A¥17,000　B¥15,000　C¥12,000　D¥9,000　E¥6,000

▶ Bunkamuraチケットセンター 03-3477-9999（オペレーター対応 10:00～17:30）
▶ オンラインチケット MY Bunkamura　MY Bunkamura（※要事前登録）　http://mybun.jp/wsb
▶ チケットぴあ …… http://w.pia.jp/t/wsb/ 0570-02-9999［Pコード：484-185］
▶ イープラス …… http://eplus.jp/wsb/
▶ ローソンチケット …… http://l-tike.com/wsb 0570-000-407（オペレーター対応 10:00～20:00）

**大阪公演**　『海賊』5/15［火］19:00 フェスティバルホール TEL：06-6231-2221（10:00～18:00）

●5歳以上入場可。ただし、お一人様1枚チケットが必要です。●演出上開演後は入場を制限させていただく場合がございます。●D席E席はBunkamuraのみのお取り扱いとなります。●出演者・演目は2018年2月1日現在の予定です。●出演者の病気や怪我等、やむを得ない事情で変更になる場合がございます。公演中止の場合を除き、演目や出演者変更等に伴うチケットの払い戻しや変更はお受けできませんので、予めご了承ください。●公演中止の場合の旅費、チケット送料等の補償は致しません。●最終的な出演者・演目は当日発表とさせていただきます。

お問合せ Bunkamura
03-3477-3244（10:00～19:00）　www.bunkamura.co.jp

こうしてバレエ団とともに日本の皆様のもとに戻ってくることができるのは、
大きな喜びです。芸術監督に就任以来8年の濃密な時を経て、
私が当初目標に掲げていた多くのことが成し遂げられたと感じています。
バレエ団は輝きを増し、ソリストは大きく飛躍し、多様なレパートリーを
広げてきました。今回の来日では、ウィーンでシーズン閉幕の
恒例となった「ヌレエフ・ガラ」と、私が振付家として
初めて手がけた全幕作品『海賊』をご紹介します。
異なるキャストが多彩に魅せる『海賊』と、私たちのユニークなレパートリーを
ご堪能いただける「ヌレエフ・ガラ」、そして舞台の上での私の姿を
多くの方にお楽しみいただけることを願っています。

［芸術監督］マニュエル・ルグリ

# *Manuel* LEGRIS

「もしこの人が生まれていなかったら、バレエ界は異なるものになっていただろう」そう思わせる人物は多くはないが、マニュエル・ルグリは間違いなくその一人だ。8歳でバレエを始め、16歳でパリ・オペラ座バレエ団に入団。1986年7月、ツアー先のニューヨークで、ルドルフ・ヌレエフ版『ライモンダ』に主演、当時同バレエ団の芸術監督であったヌレエフにより、エトワールに任命された。21歳、プルミエ・ダンスールを飛び越えての昇格だった。

ルグリには、それ以前のスター・ダンサーにはない魅力がある。それは、すべてを満たす完璧なバランス。テクニックは正確にしてダイナミック、跳躍から回転、アレグロからアダージオまですべてを得意とし、その完成度は誰もが手本としてあげるほど。音楽性は繊細で、かつ遊び心がある。表現力は詩的にしてロジカル。対をなすような特徴をすべて兼ね備えている夢のようなダンサーなのだ。

ベテランと呼ばれる年齢になってから我々を驚かせたのは、その指導力。若いダンサーの可能性を見出し、その実力を次々と開花させていった。オーレリ・デュポン、マチュー・ガニオ、ドロテ・ジルベール…みなルグリのパリ・オペラ座時代の“教え子”だ。豊かな経験で得た膨大な知識や、改善点を適確に見出す洞察力はもちろんだが、何より人間力に秀でている。自分の持つ全てを若者に与えてあげたいと心から願え、実行できるスターがどれだけいるのだろうか。バレエ界に生きる者はその価値を知っているから、このカリスマの一語一句に全精力をかけて向き合うのだ。

マニュエル・ルグリが、23年間のエトワールとしてのキャリアを終えた後、そのすべてを注いだのが2010年に芸術監督に就任したウィーン国立バレエ団だ。それ以前のウィーン国立バレエ団は、歴史あるバレエ団ではあるが、欧州トップのバレエ団としては少し心許なかった。音楽優勢の地において、オペラの二番手という印象が強かったのかもしれない。それが今や“バレエを観に”ウィーンを訪れる者が増えている。

ルグリは就任後、まずダンサーのレベルアップに注力した。ルグリのもとで踊りたいダンサーは世界中から集まり、自ら彼の厳しい基準を満たすダンサーだけを選抜した。そして徹底的に鍛えた。それぞれの個性を伸ばしつつ、ルグリ流のエレガンスと厳格さを授けたのだ。その結果、たとえばロシア流の技術にフランス流のエレガンスが加わった理想のマリアージュを持つダンサーが出現したのだ。

バレエ団の運命は、シーズン毎のレパートリーにかかっていると言っても過言ではないが、そこでもルグリは抜きんでたセンスを見せつけた。世界中の振付家を知り尽くしている彼が選ぶレパートリーは、古典から新作まで斯くあるべしと鮮やかに並び、ウィーンの地にあつらえ向きな気高さを保ちつつ、新鮮さに満ちている。観客を魅了しながら、ダンサーを育てることのできる作品の数々が、ウィーン国立バレエ団を世界トップのバレエ団に導いたのだ。

そんなバレエ史にも残る偉業を打ち立てたルグリだが、就任10年目という節目の2020年で、芸術監督の座を退くことを表明した。「就任以来すべてのエネルギーをバレエ団に注いできた。人生の次の章を迎える時期がきた」とルグリは語る。バレエへの献身が生き様となっているルグリのことだから、ウィーンで自分ができることはやり遂げたと感じたからこその決意なのだろう。

このバレエ団は、バレエの神とルグリによる奇跡の共同作業の結晶だ。今回の日本公演ではその集大成がおおいに披露されることだろう。この目にしかと焼き付けたい。

©Wiener Staatsoper/ Michael Pöhn

マニュエル・ルグリ版
日本初演

# 海賊

振付:マニュエル・ルグリ(マリウス・プティパに基づく)
美術・衣裳:ルイザ・スピナテッリ　美術・衣裳アシスタント:モニア・トルチア
照明:マリオン・ヒューレット
台本:マニュエル・ルグリ、ジャン=フランソワ・ヴァゼル
(バイロン、ジュール=アンリ・ヴェルノワ・ド・サン・ジョルジュ、ジョゼフ・マジリエに基づく)
音楽:アドルフ・アダン他(構成:マニュエル・ルグリ/編曲:イゴール・ザブラヴディン)

5.12[土]12:30/18:30　5.13[日]14:00

## 完璧な超絶技巧に酔いしれる、誰も観たことのない『海賊』——

ルグリの芸術監督就任後、バレエ団の活動でもっとも注目を浴びたのは、2016年3月。彼が初めて手掛けた全幕作品である『海賊』世界初演のことでした。世界各国のバレエ界の重鎮が集ったプレミアは、全公演ソールドアウト。最終日には、“チケット求む”の紙をもった行列ができたほどでした。

バレエ界が手放しの賞賛を贈ったこの版の驚くべき特徴は、アリが登場しないということ。ルグリは台本を徹底的に研究し、首領コンラッドとメドーラの恋物語に焦点をおきました。さらには、埋もれていたアダンの楽曲で構成された第3幕のオダリスクや、『シルヴィア』の音楽を使用したメドーラとコンラッドの美しいパ・ド・ドゥなど、ルグリ版だけで見ることのできる踊りを追加。ビルバントの恋人として登場するズルメアや、これまで好色な老人として描かれてきたサイード・パシャがハンサムで魅力的な男性として登場し、グルナーラとの間に恋愛感情が芽生えるなど、ルグリ版ならではの人物設定も作品に新たな魅力を吹き込んでいます。新たに追加された踊りでは、古典を尊重しつつ、限界まで装飾を加え技巧性を高めた、ルグリの舞を髣髴とさせる振付が楽しめます。まさに、世界の頂点を極めた彼の感性を余すことなく堪能できる作品と言えるのです。

ルグリが「超絶技巧が次々と繰りひろげられる僕の『海賊』ですが、ウィーンのダンサーはどんな複雑な技術もエレガントにスマートに見せる実力を持っています」と語る通り、主要キャストには彼が絶大な信頼を寄せるバレエ団の看板ダンサーが勢揃い。コール・ド・バレエの隅々にまで完璧主義が貫かれているダンサーたちが、『海賊』にこれまで見たことのない輝きをもたらすのです。

さらにはロシアを代表するマリインスキー・バレエ団で、アジア人初のプリンシパル昇格という快挙を成し遂げたキミン・キムがゲストとして登場。すでにパリ・オペラ座バレエ団やアメリカン・バレエ・シアターなど世界中でその実力を証明しているキムですが、ルグリが「ぜひ自分の作品を踊ってほしい」とラヴコールを送ったというからますます期待が高まります。

出演/5.13

▼マリア・ヤコヴレワ

ロシア生まれのヤコヴレワは、ルグリ版『海賊』の初演キャスト。ルグリが「自然な美しさをもち、僕がメドーラ役に求める女性らしさをもっている」と語る通り、市販の映像でも極上の美を見せている。今年の「ウィーンフィル ニューイヤー・コンサート」でも美しい古城に相応しい華やかな存在感を見せたのが記憶に新しい。

## Medora
メドーラ
(さらわれた美女)

出演/5.12〈夜〉

➤ニーナ・ポラコワ　出演/5.12〈昼〉

スロヴァキア出身のポラコワは、エネルギッシュな技術とほとばしる情熱的な演技で我々を物語へ誘ってくれる。その表現力が『海賊』にこれまでにないドラマを与えることは間違いない。ルグリのパートナーとしても度々一緒に踊っており、その絶大な信頼がうかがえる。

▲オルガ・エシナ

絵本から抜け出したプリンセスのような華やかな容姿と安定感のある技術を持つエシナは、マリインスキー・バレエ団でも主演を任されていた実力の持ち主。ウィーンで幅広いレパートリーに出会い、いままさに充実のときを迎えているダンサー。

Guest Dancer

出演/5.12〈夜〉

Mariinsky Ballet | Principal Dancer

➤キミン・キム [マリインスキー・バレエ団 プリンシパル]

キムはロシアの名門、マリインスキー・バレエ団でアジア人初のプリンシパル昇格という快挙を成し遂げた驚異のダンサーだ。韓国芸術総合学校の在学中にマリインスキー・バレエ団の研修生となり、なんと『海賊』のアリ役でバレエ団にデビューしたというから尋常ではない。15年にプリンシパルに昇格してからは、ほとんどのレパートリーに主演。パリ・オペラ座バレエ団やアメリカン・バレエ・シアターで全幕主演するなど世界中でもその実力を証明しており、ルグリが注目するのも納得の存在。現在、世界トップの実力を誇るキムが、ルグリと出会いどんな高みを見せるのか、見逃すわけにはいかない。

## Conrad
コンラッド
(海賊の首領)

出演/5.13

➤ウラジーミル・シショフ

ワガノワで学び、マリインスキー・バレエ団でも多くの主役を演じたのちにウィーンへ。甘いマスクに反してその踊りはダイナミックで野性的。ルグリがコンラッド役に必要と考える「男のエレガンス」を体現するダンサーだ。

出演/5.12〈昼〉

▲デニス・チェリェヴィチコ

ウクライナ出身のチェリェヴィチコは、現代的な高い技術と柔らかなエレガンスを持ち合わせる稀有なダンサー。ウィーンでも多くのヌレエフ版古典作品の主役を踊り高い評価を得ている。「成熟した男性らしさ」が求められるコンラッド役で新たな魅力を発見できるだろう。

出演/5.12〈夜〉

◀リュドミラ・コノヴァロワ

初演キャストであり、映像でもグルナーラ役を演じている彼女は、ロシアでのキャリアを経てウィーンに来たダンサー。どんなに複雑な技術も繊細に、そしてチャーミングに舞う姿が印象的。ロシア流の強靭な技術とフランス的エレガンスが融合した現代における理想のバレリーナ像を体現している。

## Gulnare
グルナーラ
(メドーラの友人)

➤橋本 清香　出演/5.13

精密な技術と天性の華を持つ彼女が、バレエ団の最高位に昇格したのはこの『海賊』の初演時。なんと難役メドーラとグルナーラを中1日で両方務め、終演後ルグリより最高位に任命された。神聖な山に吹く風のような爽やかさと清らかさをもつ彼女は、日本が世界に誇るダンサーだ。

出演/5.12〈昼〉

▲ナターシャ・マイヤー

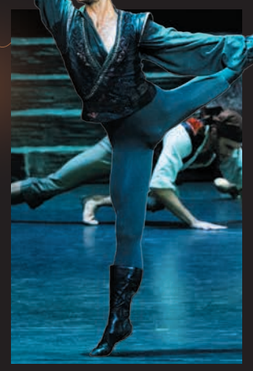
美しい容姿と理想的な甲のラインを持つウィーン出身のマイヤーは、学生時代からバレエ界の注目を集めていた。とくに伸びやかなア・ラ・スゴンドは一度みたら忘れられない。入団後はルグリのもと、表現力を伸ばし次々と主演を任されているまさに“ルグリ・チルドレン”を代表する存在だ。

## Birbanto
ビルバント
(コンラッドの友人)

▼木本 全優

兵庫県出身の木本を初めて見た方は、まず日本人離れした美しい脚のラインに驚くだろう。そして決して押しつけがましくないクリーンな技術を持つことに再び目を見張るのだ。昨年、最高位に昇進して以来レパートリーをさらに広げ躍進を続けている。

出演/5.12〈昼〉



出演/5.12〈夜〉5.13

▲ダヴィデ・ダト

イタリア出身のダトは、南欧らしいエネルギーと色気を持つ今もっとも勢いのあるダンサー。映像でもビルバントを演じているが、身体にパネが入っているのかと思うほどのしなやかなジャンプに魅了されない者はいないだろう。その美しいマスクでネスプレッソのPRビデオにも抜擢されている。

## Le Corsaire

©Wiener Staatsballett/ Ashley Taylor ©Lee Jae Cheon ©N.Razina

Nurejew Gala

《ワルツ・ファンタジー》より
（振付:ジョージ・バランシン／音楽:M.グリンカ）

《Opus 25》
（振付:エノ・ペシ／音楽:F.ショパン）

《ヨゼフの伝説》より
（振付:ジョン・ノイマイヤー／音楽:R.シュトラウス）

《ソロ》
（振付:ハンス・ファン・マーネン／音楽:J.S.バッハ）

《ペール・ギュント》より
（振付:エドワード・クルーグ／音楽:E.グリーグ）

《ランデヴー》より
（振付:ローラン・プティ／音楽:J.コスマ）

《マーマレーション》より
（振付:エドワード・リアン／音楽:E.ボッソ）

《ル・シーニュ 白鳥》
（振付:ダニエル・ブロイエット／音楽:O.ヴォイチェホヴスカ）

《コンチェルト》より
（振付:ケネス・マクミラン／音楽:D.ショスタコーヴィチ）

《赤のジゼル》より
（振付:ボリス・エイフマン／音楽:P.I.チャイコフスキー）

《ストラヴィンスキー・ムーヴメンツ》より
（振付:アンドラーシュ・ルカーチ／音楽:I.ストラヴィンスキー）

《シルヴィア》より
（振付:ジョン・ノイマイヤー／音楽:L.ドリーブ）

# ヌレエフ・ガラ

5.9［水］18:30 5.10［木］14:00

## “ヌレエフ・セレブレーション”
（振付:ルドルフ・ヌレエフ／構成:マニュエル・ルグリ／音楽:P.I.チャイコフスキー、A.グラズノフ）

《くるみ割り人形》第2幕より
“アダージオ”

《ライモンダ》第2幕より
“アブデラーマンのヴァリエーション”
“サラセン人の踊り”
“ライモンダのヴァリエーション”
第3幕より
“ヘンリエットのヴァリエーション”
“4人の男性のヴァリエーション”
“クレメンスのヴァリエーション”

《白鳥の湖》第1幕より
“パ・ド・サンク”
“王子のヴァリエーション”
第2幕より
“スペインの踊り”
“黒鳥のパ・ド・ドゥ” ほか

※上演順の表記ではございません。

## 生誕80年、門外不出のガラ。国外初披露！

2011年、伝説のダンサーであり、自らの師であるルドルフ・ヌレエフの芸術性と偉大な功績を継承すべく、ルグリはウィーン国立バレエ団で「ヌレエフ・ガラ」をスタートさせました。それ以降、このガラは毎年、バレエ団のシーズン最後を飾る公演として行われています。

ヌレエフは、古典バレエの改訂にも熱心で多くの“ヌレエフ版”と呼ばれる改訂版を生み出しました。そんな彼が初めて古典改訂作品を発表したのが、ウィーン国立バレエ団。1964年に『白鳥の湖』を創作し自ら主演して以来、ウィーンは彼の活動拠点であり、1982年にはオーストリアの市民権を取得しています。

そんなヌレエフを語るのにマニュエル・ルグリほど適切な人物はいません。1986年のニューヨーク公演でルグリを、パリ・オペラ座バレエ団のエトワールに任命したのはヌレエフであり、彼は世界中の公演にルグリを連れ自分の芸術性を惜しみなく伝えました。「ヌレエフ・ガラ」ではヌレエフの魂を継承したルグリが、彼の芸術性を再現するのです。

このガラのためにウィーンを訪れる人がいる理由は、演目の多様性。世界中の巨匠振付家による作品が万遍なく並ぶだけでも豪華ですが、ルグリがいまもっとも関心を寄せる若手振付家の作品を見られるのです。今年はとくにヌレエフ生誕80周年という記念年ということもあり、これまで以上に豪華なラインナップが実現。21世紀版『瀕死の白鳥』と言えるブロイエット振付の『ル・シーニュ 白鳥』や、バレエ団のダンサーであり豊かな振付の才能に恵まれたペシやルカーチの作品は世界のバレエ界が注目する話題作です。

そして公演のハイライトはすべてのヌレエフ版を踊り熟知しているルグリが、ヌレエフの古典作品から見どころだけを集め構成する夢のようなプログラム「ヌレエフ・セレブレーション」。「私のバレエが上演され続ける限り、私は生きている」というヌレエフの言葉を実感し、時空を超えバレエの歴史を旅していただけるでしょう。

《赤のジゼル》
バレリーナとしての成功のうち精神を病み波乱に満ちた一生をおくったロシアのバレリーナ スペシフェワの生涯に基づく作品。スタイリッシュかつ心理描写巧みなエイフマンの代表作。

《ペール・ギュント》
イプセンとグリーグ、2つの「ペール・ギュント」を、新進気鋭の振付家クルーグが独自の視点で再構成した意欲作。

《ソロ》
男性ダンサーの動きの多様性と無限の可能性を再認識できるオランダの巨匠マーネンによるソロ。

《Opus 25》
振付家としても活躍するバレエ団のダンサー ペシによる美しいデュエット。

《ル・シーニュ 白鳥》
まさに今世紀版の『瀕死の白鳥』と言える超注目作。舞台には白鳥と少年が登場。美と愛と自由を象徴する白鳥と、死にゆく白鳥が子に見せる人生の終末。強く美しく優しく悲しいバレエがここに。

《マーマレーション》
鳥が突然群れをなすような現象を指すマーマレーション、舞台ではいかに表現されるのか。

《ストラヴィンスキー・ムーヴメンツ》
バレエ団のダンサー ルカーチが同僚たちの個性を最大限に生かすべく創った現代的な美しさあふれるバレエ。


《ヨゼフの伝説》
ディアギレフの依頼で作曲されたシュトラウスの壮麗なバレエ音楽に、ノイマイヤーの美的世界が広がる。

《コンチェルト》
ショスタコーヴィチのピアノ協奏曲第2番に英国バレエの巨匠マクミランが振り付けた抽象バレエの秀作。

《ワルツ・ファンタジー》
グリンカの音楽を視覚化するバランシンの至芸をウィーンの精鋭たちが踊る。

## “Nurejew Celebration”
“ヌレエフ・セレブレーション”

《白鳥の湖》

ヌレエフ作品におけるルグリの舞は手本として語り継がれている。その教えを受けるウィーン国立バレエ団は、超絶技巧が散りばめられたヌレエフの振付を、いまもっとも正しく美しく継承しているバレエ団と言えるだろう。作品の魅力を知り尽くしたルグリが見どころだけを集めた夢のひと時を叶える。


《ライモンダ》

《ランデヴー》

## 奇跡のダンサーはいま未開の境地へ——
## 舞踊の神に選ばれしマニュエル・ルグリの舞、再び！

日本初の「ヌレエフ・ガラ」には、ルグリ自らも出演する。作品は、21世紀を代表する巨匠による2つのマスターピース。昨年9月、レティシア・プジョルの引退公演で久々にパリ・オペラ座の舞台に登場し、変わらぬエトワールの舞でパリの観客を魅了したノイマイヤー振付の『シルヴィア』。歳を重ねたシルヴィアとアミンタが再会するこのシーンは切ない愛にあふれている。ノイマイヤーがもっとも得意とする繊細な心情描写をいまのルグリがどう演じるのか、見逃すわけにはいかない。

そして、フランスが誇るプティ振付の『ランデヴー』。パリの下町で死を告げられた若者は、世界最高の美女とのランデヴーがあると嘘をつき逃げようとする。若者を待ち受けていた運命とは…？ルグリは昨年初めてこの作品を踊り、尽きることのない探究心で我々を驚かせた。「枯葉」のメロディと一体となったルグリの名演を再び観られるとは幸せだ。

ダンサーとしてもいまだ新たなる境地を切り開き続けるルグリ。とどまるところを知らないこの天才ダンサーは、いま再び、我々をまだ知らぬ新たな感動世界に誘うだろう。

《シルヴィア》

©Wiener Staatsballett/ Ashley Taylor ©Wiener Staatsoper/ Michael Pöhn ©Jack Devant ©Jack Mitchell/ Getty Images ©Hidemi Seto